

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520158

研究課題名(和文)海軍軍楽長・吉本光蔵日記の研究 20世紀初頭の日欧間における音楽情報交流

研究課題名(英文)A Study of Diaries by the Japanese Naval Bandmaster Mitsuzo Yoshimoto (1863-1907): Focusing on the Musical Exchange between Europe and Japan during the Early Twentieth-Century

研究代表者

塚原 康子 (TSUKAHARA, Yasuko)

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：60202181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：海軍軍楽長・吉本光蔵(1863～1907)の日記を精読し、以下の研究成果を得た。(1)ベルリン留学時代の日記(1900～1902年)から吉本のベルリンでの音楽体験を把握した。海軍軍楽隊が1908年に始める東京音楽学校への依託生制度はベルリン音楽院の軍楽学生制度をモデルにした可能性が高い。20世紀初頭のヨーロッパには、川上音二郎一座らの興行や吉本が作成した五線譜を通して日本音楽の情報が流布した。(2)日露戦争中の日記(1904～1905年)から第二艦隊旗艦・出雲に乗艦中の軍楽隊の活動状況を把握した。軍楽隊は定例の奏楽以外に作戦遂行や戦死者追弔にも奏楽し、兵員による琵琶・尺八の私的演奏もあった。

研究成果の概要(英文)：At the Berlin Conservatory of Music from 1900-1902, Mitsuzo Yoshimoto (1863-1907), one of the naval bandmasters of Japan, studied as a "bandmaster student". After returning to Japan, he served as the bandmaster of the Second Battle Fleet's flagship "Izumo" during the Russo-Japanese War in 1904-1905.

This study aims to examine his diaries from the viewpoints of the musical exchange between Europe and Japan at that time. The results are as follows: 1) Europeans became to considerably recognize Japanese music from Japanese theatrical troupes and Yoshimoto's transcriptions of Japanese songs. 2) From 1908, the Japanese Navy adopted a specialized educational program for bandmaster candidates at the Tokyo Conservatory of Music. It is very likely that it was modeled after the Berlin Conservatory of Music's program. 3) During the war, the naval band played not only for daily duties, but also during operations and ceremonies for the war dead. Biwa and shakuhachi, were also played privately.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：吉本光蔵 軍楽隊 留学生 ベルリン音楽院 日本音楽 日露戦争 日比谷奏楽

1. 研究開始当初の背景

近代日本音楽史の研究は、21世紀に入るとくに大正・昭和戦前期を中心に増加しつつあるが、こと明治期の陸海軍の軍楽隊に関する研究は、史料制約などから、音楽学校や民間での音楽活動に比べても少なく、1980～90年代の中村理平によるお雇い外国人に関する研究や研究代表者による海軍軍楽隊の研究以後、あまり大きな進展がなかった。

また、日本の西洋音楽に関しても、国内の音楽状況と、その情報源となった欧米の音楽状況との関係を具体的に検証できるような一次史料はほとんど残っていないために、たとえば幸田延・幸田幸・瀧廉太郎・山田耕筰といった明治期の音楽留学生についても、現地での音楽体験と帰国後の活動との影響関係は詳細には解明されていない。

ただし、1905年の発足当時、吉本が携わった日比谷奏楽については、昭和期までの全プログラムが谷村政次郎により2010年に公開され、幸田延の二度目のヨーロッパ滞在時の日記も、瀧井敬子・平高典子によって2012年に公開され、活用が可能になった。

そうした状況の中で、1899年から1902年にかけて海軍軍楽隊から初めてベルリンに留学した吉本光蔵(1863～1907)の日記が、御遺族から東京藝術大学附属図書館にマイクロフィルムの寄贈という形で提供されたことは、画期的なことであった。吉本が残したベルリン留学時代の日記(1900～1902年)と、帰国後の日露戦争従軍期をふくむ日記(1904～1906年)の精読を柱に、上記の二点(軍楽隊研究、日欧間の音楽情報交流研究)を中心にした解明が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、貴重な史料である吉本日記を読解し、吉本のベルリン留学時の体験と、帰国後の活動(日露戦争への従軍、平時の軍楽隊運営)を詳細に把握することである。

第二に、留学時代と帰国後の日記がともに残っていることに照らして、留学時代のヨーロッパでの見聞や活動が帰国後の活動にどのような影響を与えたのかを具体的に解明することである。

3. 研究の方法

研究方法としては、これまで全く紹介されていない吉本日記を精読し、内容を把握することを第一義とした。

(1)吉本のベルリン留学時代は、1900年前後のいわゆる「世紀転換期」に相当する。当時、すでに百名程度いたというベルリン在留日本人の中には、外交官や陸海軍人のほかに、当地で1898年から月刊誌『Ost=Asien 東亜』を発行し私設公使の異名をとっていた玉井喜作、ベルリン大学附属東洋語学校教師として赴任し帰国後『洋行土産』(1903)を発刊し

た児童文学者・巖谷小波、二度目の留学で滞在中の箕作元八(井出文字・柴田三千雄編『箕作元八滞欧「梅籬日記」』1983年刊あり)らが見いだせる。このほか1901年には、パリ万博後のヨーロッパ巡演の途次、ベルリンを訪れた烏森芸妓一行や川上音二郎一座(倉田喜弘『海外公演事始』1994年刊あり)も来会させた。

これらの資料や先行研究を通じて関連情報を収集し、吉本日記の記述と付き合わせるとともに、吉本が1900年パリ万博の視察に訪れたパリと、ベルリンにおいて現地調査を行い、パリ音楽院・ベルリン音楽院に関連する資料の調査、吉本の寄宿先・訪問先等の実地調査などを通して、日記記載事項の裏付けをとった。

(2)帰国後の日記のうち、日露戦争従軍期分(1904年1月～1905年3月)に関しても、日露戦争に関連する先行研究に照らして、戦時の海軍軍楽隊の奏楽にかかわる記載事項を確認するとともに、呉・佐世保での旧海軍関係施設見学と関連資料調査を通して、立体的な理解と考察に努めた。

吉本の出雲退艦後の日記(1905年3月～1906年12月)からは、海軍軍楽隊の人事・教育・運営の中核であった横須賀海兵団軍楽隊の動静の把握に努めた。また、1905年の日比谷奏楽の開始や東京湾凱旋観艦式の実施、従来知られていなかった1906年の韓国からのエッケルトの来日にかかわる消息などにも注目した。

4. 研究成果

本研究の成果は、研究期間中に3本の雑誌論文(うち1本は連携研究者との共著)、1件の学会での口頭発表、関連するレクチャー2件を通して発表した。口頭発表に基づく論文を2014年度大学紀要に発表する予定である。主要な研究成果は以下のとおりである。

(1)ベルリン留学時代の日記3冊(1900年～1902年)については、精読して記述内容を把握し、翻刻の第一稿を作成した。これらの日本語日記と別に、2011年に東京藝術大学大学史史料室に寄贈された1902年の吉本のドイツ語日記1冊については、専門家に翻刻と翻訳を依頼し、記載事項の少ない日本語日記を補完する内容であることを確認した。

帰国後の日記3冊(1904年～1906年)のうち、日露戦争従軍期については記述内容を把握し、翻刻の第一稿を作成した。日露戦争後の日記(1908年3月～1909年)の講読は現在も継続中である。

これら吉本日記の全容については、御遺族の意向を尊重しつつ、公刊をめざして、残る1906年分の翻刻と全体の校正作業を今後とも継続して進めていきたい。

(2)ベルリン留学時代の日記からは、当時のベ

ルリン在住の日本人（幸田幸・瀧廉太郎・比留間賢八らの音楽関係者、軍人会などを通して交流の深かった軍関係者など）やドイツ人（エッケルト一家、ベルリン音楽院関係者、踏舞会関係者）との交友、ベルリンでの音楽生活（演奏活動、コンサートやオペラ・演劇の鑑賞）の実態が把握できた。吉本が現地で実際に聴取した演奏曲目の一部は、帰国後の日比谷音楽でもレパートリーとして演奏されていたことが確認された。

(3)吉本は、1900年10月にベルリン音楽院の入学試験に合格し、帰国命令を受ける1902年3月まで学ぶが、ベルリン音楽院には「軍楽学生」として在籍していた。このことは、当時ドイツで刊行されていた『ドイツ軍楽年鑑（*Militärmusiker Almanach für das Deutsche Reich*）1902年版に、ベルリン音楽院39名、ドレスデン音楽院とミュンヘン音楽院に各3名の軍楽学生の在籍が記録され、その中に吉本の名も記載されていることから確認できる。日記中にも、軍楽学生のクラスや演奏会・集会への出席、ベルリン近郊の連隊での軍楽長試験への陪席などの記事が散見される。

現役の軍楽長を音楽院で専門的に学ばせるというドイツのこの制度は、1908年から海軍軍楽隊が始める東京音楽学校への依託生派遣制度のモデルとなった可能性が高い。また、吉本の帰国後の1903年には、ベルリン音楽院校長ヨアヒム、吉本の軍楽指導教授ロスベルク、クラリネットの指導教授シューベルトに対して日本政府から叙勲が行われており、軍関係者の留学は文部省留学生以上に手厚い国家的支援の下でなされていたこともわかった。

(4)吉本日記の1900年パリ万博への視察旅行、1901年の日本人一座によるベルリン興行（烏森芸妓一行、川上音二郎一座）、ベルリン大学のシュトゥンプフ、フォン・ホルンポステルとの接触などの記述から、20世紀初頭のヨーロッパにおいて、現地での日本人一座による興行や、吉本が持参した三味線音楽の五線譜を通じて、日本音楽の情報が流布し、人々にも認識され、一種の音楽上のジャポニズム現象を呈していたことが確認された。

これまで所在や内容が不明であった吉本作成の五線譜については、少なくとも「楓葉」「越後獅子」「春雨」「夕暮」「沖の白帆」「櫓太鼓」「鞠歌」「五十三駅」の8曲が「海軍練習所蔵版／海軍一等軍楽手吉本光蔵取調」として1890年に公刊され、国立国会図書館に合冊されて所蔵されていることが確認された。吉本の採譜は、歌と三味線を別々に採譜した精緻なもので、公刊された日本音楽の五線譜化として、東京音楽学校編『箏曲集』（1888年）などと並ぶ最初期のものの一つであったことになる。吉本はこの楽譜をドイツに持参したが、求めに依

じて、書き写して滞欧中の知人に郵送したり、烏森芸妓一行の代理人に貸与したり、フォン・ホルンポステルらに提供したりして活用していた。

(5)日露戦争中の海軍では、第一艦隊～第四艦隊軍楽隊が編成され（軍楽師1名に率いられた26名）、それぞれ旗艦に乗り組んだ。これらの各軍楽隊員の昇進や病気に伴う交代・補充は、官階や担当楽器を考慮しながら、横須賀海兵団を中心に呉・佐世保・舞鶴の各海兵団軍楽隊とも連携して行われた。

吉本は、第二艦隊旗艦・出雲に1904年1月～1905年3月まで乗艦したが、従軍中に《旅順陥落行進曲》（1904年8月）と《浦塩沖氷海海戦》（1905年3月）の新作2曲を作曲・初演したのに加え、各海兵団在勤者を通じて楽譜の調達（購入・筆写）や郵送も依頼していた。

(6)第二艦隊軍楽隊は、定例の奏楽として、大砲手入時の奏楽と司令長官室での夕奏（ほぼ毎日）、石炭搭載時の奏楽（週1回程度）を日常的に行った。このほかに、外国艦や司令長官・将官等に対する敬礼奏楽、自艦・僚艦の兵員・家族会や入港時の居留民に対する慰問奏楽などが随時行われていた。

また、特別な奏楽として、1904年2月～3月の第一次・第二次旅順口閉塞作戦に際して、選抜された決死隊員の見送りに「決死隊ノ歌曲」、帰還時には歓迎奏楽を行い、戦死者の葬送・追弔にあたっては敬礼曲《命を捨てて》を奏し、1904年8月14日の蔚山沖海戦では5時間以上に及んだ激戦後に「凱旋奏楽」を行っていたことが確認された。

このほか出雲艦上では、兵員による薩摩琵琶・筑前琵琶・尺八の私的な演奏の記事も見られ、軍楽隊以外の身近な音楽も戦場で鳴り響いていたことがわかった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

Yasuko Tsukahara, State Ceremony and Music in Meiji-era Japan, *Nineteenth-Century Music Review*, vol.10, December 2013, pp.223-238、（査読有）

塚原康子「19世紀末のヨーロッパに留学した日本の軍楽隊員」『第10回日中音楽比較研究国際学会議論文集』、2013年3月、493～500頁、（査読無）

塚原康子・平高典子「海軍軍楽長・吉本光蔵のベルリン留学日記」『東京藝術大学音楽学部紀要』第37集、2012年3月、43～60頁、（査読有）

〔学会発表〕(計1件)

塚原康子「日露戦争時の海軍軍楽隊 海軍軍楽長・吉本光蔵の明治37・38年日記から」日本音楽学会第64回全国大会、2013年11月2日、慶應義塾大学、東京都港区

〔その他〕

講演・レクチャー(計2件)

塚原康子「開国期における外来音楽の受容」レクチャーコンサート「黒船来港と外来音楽」(藝大プロジェクト2012「幕末～その時、世界は?」)2012年10月20日、東京藝術大学奏楽堂、東京都台東区

塚原康子「近代日本音楽史について」世界音楽週2011(招待講演)2011年11月3日、中央音楽学院、中国北京市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塚原康子 (TSUKAHARA Yasuko)
東京藝術大学・音楽学部・教授
研究者番号：60202181

(3) 連携研究者

平高典子 (HIRATAKA Noriko)
玉川大学・文学部・教授
研究者番号：00266248